

南北朝の動乱



* 都野家文書1「後醍醐天皇綸旨」。本文は「足利尊氏・同直義已下の輩、反逆の企てであるの間、追討せらるるところなり、都野又五郎信保鎌倉に発向せしめ、軍忠をいたすべしてへり、天氣かくの如し、これをつくせ」

解説

鎌倉幕府の滅亡後に後醍醐天皇が始めた政治（建武の新政）は、「朕が新儀は未来の先例」ということばに代表されるような、先例を無視した独裁的なものだったため、武士のみならず公家の支持も次第に失います。そこで、足利尊氏は、鎌倉を占拠した北条氏の残党を平定した後も天皇の帰京命令に従わず、新政権に反旗をひるがえしました。

その後、京都を制圧した尊氏が新たに光明天皇を擁立すると、後醍醐天皇は吉野に逃れ、ここに建武の新政は崩壊しました。こうして、以後約60年間にわたって、吉野と京都の南北二つの朝廷とそれぞれに味方する勢力が、全国的に争う南北朝の動乱がはじまりました。

写真は、後醍醐天皇が1335（建武2）年11月石見の武士である都野信保に対して、天皇に叛いた足利尊氏・直義兄弟を追討するために鎌倉へ向かうように命じた文書です。同じような内容の文書が全国の武士に対して出されたと考えられます。

- * 後醍醐天皇綸旨は、ほかに熊谷家文書3（28の5）、3（28の7）、9（30の13）、9（30の20）などがあります。
- * 足利尊氏の出した文書としては、三浦家文書甲8（167）、熊谷家文書3（28の7）、3（28の17）、4（30の24）、9（30の18）、9（30の19）、9（30の21）、10（26の7）、山内家文書甲2（17）、（19）、高洲家文書2、4などがあります。
- * 備後の山内氏一族契状は、南朝、尊氏派と直義派とに分裂した北朝の三つ巴の状況下で、一族が団結を誓ったものとして著名です（山内家文書甲2（25））。